

第8回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「上弦の海」

神奈川県 日本女子大学附属高等学校 3年 上岡 沙都



賢治のまちから
高校生★童話大賞



優秀賞 〈銀の星賞〉

『上弦の海』

神奈川県 日本女子大学附属高等学校 三年 上岡 沙都

『ピッ……ピッ……ピッ……ピッ……』

僕の枕のとなりで心電計が単調なリズムを刻んでいる。それに合わせて出てくる緑色の波形も、しぶきを上げて打ち寄せるような勢いもなく、ただ右から左へ動くだけだ。それだけじゃない。他にも訳の分からない色々な機械が僕とチューブで繋がれている。

「いつまでこれが続くんだろう……。」

この三年間、僕はこのベッドから出ていない。学校にも行ってないし、友達にも会っていない。本当に毎日が同じ事の繰り返し。僕もいつか僕を取り囲むこの機械の一部になってしまわないだろうか……。

そんな事を考えながら目を窓の方に向けるとビニールのカーテンの向こうにぼんやりと金色の月が見えた。目がかすんでよく見えないけれど、きつとあれは上弦の月だ。

「そうだ、今日なら会えるかもしれない。」

僕は深く息を吸い、目を閉じた。そしてゆっくり三つ数える。一……二……三……

次の瞬間目を開けると、窓に白いワンピースの女の人が腰かけていた。

「シヨコラ……！」

僕は嬉しいやら何やらで顔を真っ赤にしながら目をこすった。うん、やっぱりシヨコラだ。シヨコラが会いに来てくれたんだ！

「久しぶり、カイリ。具合はどう？」

そう優しく言葉をかけるとシヨコラは窓から軽やかに下りたった。そして



白いワンピースには不釣合なゴーグルやヘルメット、登山用の大きくてごついリュックをがちやがちやいわせながら、これまた不釣合な裸足でぺたぺたと歩いてきた。ビニールのカーテンを開け、シヨコラが僕のベッドの足元に座ると、僕らは顔を見合ってニカニカ笑い合った。

「ねえ、今度はどんな所に行ってたの？ 最近ずっと見てなかったから心配してたんだ。」

「ごめんごめん。ちょっと今回は長くかかったからね。でもすごい所行って来たのよ。さて、どこから話そうかしら……？」

シヨコラは僕のお兄ちゃんの元彼女で、あのでっかいリュックと裸足でどこへでも行ってしまいう冒険家だ。寝たきりの僕を心配して、お兄ちゃんと別れた今でもこうしてこっそり会いに来てくれる。そして旅先での不思議で面白い思い出話を聞かせてくれるんだ。そう、ちょうどこんな、上弦の月が輝く晩に……

「そうそれでね、夜の森でばったり海賊に会っちゃったの。そしたらその海賊達、私よりびっくりしちゃってね。金貨から宝石から全部落つことして一目散に逃げて行ったわ。」

「へえ、ずい分臆病な海賊だねえ。」

「でしょ？ でもその宝石がすごい量だね。一つ、また一つと夢中で拾い集めたわ。ほら、きれいでしょ？」

そう言ってシヨコラは両手からこぼれんばかりの宝石の山を見せてくれた。色とりどりに輝くそれは、夜の群青を透かして幻のようだった。

「あら、ずい分気に入ったみたいね。よし、じゃあ好きなのあげる！」

僕は一つ一つ月明かりに照らして、海の底の様な淡い青色の石を選んだ。

「これ、何ていうんだろう？」

「ああ、それはマリングラスね。宝石ではないんだけど、捨てられたお酒のビンなんか、割れて波に揉まれてできるの。」



「じゃあこれって……ゴミ?」

僕はちよつとがっかりした。これだけたくさんきれいな宝石があったのに、なんでよりによってこれを選んでしまったのか……。

「身もフタもない言い方をすればね。でも良いじゃない。私好きよ。だって遠い街の知らない誰かが使ったものが、こうして海を旅して自分の手の中にあるんだもの。それって何だかロマンチックじゃない? それに、とってもきれいだわ。」

シヨコラにそう言われると、何だか急にこの石が愛しく思えてきた。そうだ、こいつは長い間海を漂ってやつとの思いでここまで来たんだ。僕はそんな事を思いながら青い石を握りしめて、シヨコラの話に聞き入った。

「そうして海賊達が逃げた跡を辿って宝石を集めてたら、広い広い海に出たの。海賊達が慌てて出した船が、もうずいぶんと遠くの方にあつたわ。あーあ、もう宝石集めも終わりか、って思ってた下を見たら……まだあつたのよ! 海に沈んでいく宝石が! それがどうしても欲しくって……」

「……まさか。」

「そう、そのまさか! リスみたいにはつぺたを膨らませて大急ぎで潜つたわ。ゆっくり沈んでいく宝石を集めているうちにいつの間にか海の底まで来てしまつてね。最後の一つを拾って顔を上げた時、本当にびっくりしたわ。なんとあたり一面が草原だったの! 海賊達が落としていった宝箱や王冠が間からキラキラ光って、それを隠すように草がゆらゆら潮になびいていたわ。そしてその草原の中には海面に届いてしまふんじゃないかって思う位大きな塔があつたの。いつの時代のものか分からないけれど、相当古いんじゃないかしら。」

そう言うとシヨコラは僕に何枚か写真を見せてくれた。慌てて逃げていく海賊船の写真には少し笑ってしまったけれど、深い青緑の海底に吸い込まれていく宝石や、オーロラの様に差し込む月の光には息を飲んだ。そして



例の草原と塔の写真。草というより藻に近いそれが稲穂の様にたなびき、その奥から少し傾いた灰色の塔がのぞいていた。右に左に泳ぐ魚の群れがなければ海中だと分からない様な、何だか変な場所だった。その奇妙な写真をめくると、しわくちやのメモが出てきた。

「ああ、そうそう。この草原はね、ウミシヨウブの草原だったの。知ってる？ 海底に根を張って、百年に一度だけ花を咲かせるのよ。」

そして運良くその現場に居合わせる事が出来たのだと少し自慢気に話すシヨコラを横目に僕は次の写真をめくった。海底から水面を見上げて撮ったものらしく、ぼんやりした月明かりが大小二つの影を照らしていた。

「その塔の近くまで行って見たらね、急にあたりが暗くなったの。どうしたんだろうと思うって上を見たら、とっても大きなジンベエザメと長い髪の女の人が寄り添って泳いでいたの。ゆっくりゆっくり尾ヒレを動かして塔のまわりを回っていたわ。何の意味があるのか分からなかったけれど、これは絶対何かある！ と思ってその後を追って私も塔のまわりを回って見たの。何周も何周も、そう、息をするのも忘れる程に……ってあれ！？ そういえば私ずっと息継ぎしてない！

……そこでやっと気付いたの。自分の頭を泡がすっぽり覆っている事に！ 足元のウミシヨウブが花を海面に飛ばすために空気を溜め込んでいて、たくさん泡がもれていたからきつとそれが私の頭についたのね。泡が湧き上がるウミシヨウブの草をめくってみたら、大きな蕾があったわ。中の白い花びらが少し見えていて、今にもはじけそう……

その時急に足元からポコポコって大きな泡がたくさん出てきてね、何だろうと思って泡を追って上を見上げたら大きなジンベエザメの影から月がのぞいたの。そしてそれが完全に姿を現した瞬間……

『わ——っ！』

私は蕾に乗せられて、泡に揉まれながら上に飛ばされていったわ。あんな



に高く感じられた塔もあったという間。ぐんぐんぐん昇って行って、最後はぽーんと空中に放り出されちゃって。ああ、高い所から水に落ちると痛いよね、と思って覚悟して歯を食いしばっていたら、拍子抜けしちゃう位フワフワした所に落ちたの。うきわ位あるおっきな白い花の上に！
さつきまで一緒に飛ばされていたあの蕾が、こんなに立派になっちゃって……

『ポンポンポンポンッ！』

そんな事を考えている間にもどンドン蕾が音を立てて開いて、あたり一面、白い花でいっぱいになったの！ 真っ白で大小様々な花びらにほんのり月の光が染みて、あたりを照らしながら海面をすべってまわって……私の乗っていた花もくるくる回って目が回っちゃったわ。それでフラフラになったところを急に誰かに呼び止められて、

『困るわね、これじゃ調査にならないわ』

って言われたの。慌てて見上げたら、そこには……。

「そこには……？」

「若い女の人が立っていたの。ジンベエザメと泳いでいた、あの髪の毛長い人。そしたらその人がね、

『あら、シヨコラじゃない！ 久し振りねえ！』

って。」

「知ってる人だったんだ？」

「そうみたい。でも私誰だか分からなくって……かといって知らん顔するのも悪いと思つてとりあえず話を合わせておいたわ。」

「ええ！？ それ……大丈夫だったの？」

「うん！ すごく楽しく話せたわ！ 一緒にいたジンベエザメも見た目からは想像もつかない程大人しくて優しい目をしてね、なんだか可愛くなっちゃった。それから私も彼女と一緒にジンベエザメの背中に乗ってお話



したの。あの草原がウミシヨウブだった事もその時知ったのよ。本来なら大潮の満月の夜に花を咲かせるはずなのに、あなたが来たからみんな良い所を見せたくて上弦の月なのに咲いちゃったのよ、ってちょっと怒られたわ。」

シヨコラは少ししょんぼりしながら、でも嬉しそうにそう言った。僕は海面に浮かんだたくさんさんの花の写真を見つめて、ある一つの思いをめぐらせていた。

『僕もいつか、ここに行けるかな』

シヨコラがここに来るたびに、僕はそう思っている。今はこの通りベッドから出る事もかなわないけれど、いつの日か絶対に良くなって、シヨコラと一緒に世界中を旅したい。毎日が不思議とスリルの連続で、きつと想像もつかない未来が待ってるんだろうな……

「それからまたいろんな話をしたわ。彼女が海洋学者で、ジンベエザメを連れて七つの海を旅した事、船酔いが立ち所に治る薬の事、人魚を釣ろうとした老人の事……そうそう、カイリの事も話したの。私の昔の恋人の弟で、旅の話が大好きな子がいるって。でもね、変なの。私とその子の病院に時々行って土産話をするんだって言ったたら、急に顔を覆って泣き出してね。私にありがとう、ありがとうって言うの。きつとあの子、寂しい思いしてるだろうからって。この人なんだけど、知ってる?」

シヨコラが差し出した写真を見た途端、僕ははっと息をのんだ。どうしてだか分からないけれど、喉の奥がキュツと狭くなるような……懐かしさを感じた。

「カイリ?」

勝手にあふれてくる涙でシヨコラの顔も見えなくなっていた。ただ温かい手が僕の頭を撫でている感触だけが分かった。そして、すつ、とその手は僕から離れていった。とどまる所を知らない涙を懸命に拭いて急いで顔を



上げると……そこにはもう、シヨコラの姿は無かった。

『ピッ……ピッ……ピッ……ピッ……』

僕が目を開けると、またいつもと同じ風景が待っていた。シヨコラ……どこに行ってしまったんだろう。何のお別れもなしに消えるなんて、今までなかったのに……。そんな事を考えてソワソワしている所に、ガラッとドアを開けて人が入ってきた。

「シヨコラ！」身を乗り出して叫んだ僕の視線の先には……お兄ちゃんがいた。全くこんな時にまぎらわしい。期待はずれのふくれっ面に、さすがにお兄ちゃん的笑顔も引きつった。

「なっ何だよ……。せっかく可愛くもない弟を心配して来てやったつのに。ほら、ちゃんと寝てなきゃ駄目だろ。」

「……うん。」

「おいおい、どこ行ったんだよいつもの元気は！ 熱でもあるのか？」

お兄ちゃんはそう言うのと左手で自分の額を押さえながら、右手を僕の額にあてた。そんなんじゃないよ、と思いながらも僕はじっと目を伏せていた。じんわりと手の温度が伝わってくる。温かいけれど、昨日の温かさとは違う。そう思うと、急にまた悲しくなってきた。

「うーん、熱はないみたいだけど……ってうわああ！」

びっくりしてのけぞったお兄ちゃんは勢いよく尻もちをついた。

「どどっどうしたんだよいきなり！ そんな泣く程お兄ちゃん嫌か!？」

「違うっ……けどっ……。」

「……お前今日変だぞ？ 何か嫌な事でもあったのか？ 何でも聞くから、話してごらん。」

心配そうに覗き込むお兄ちゃんを前に、僕は少し戸惑った。シヨコラが会いに来てる事は内緒だったし、もしその事を聞いたらお兄ちゃんはやきも



ちを焼くかもしれない。でも今はそんな事を言っている場合ではない。

「……怒らない?」

「うん、怒らない。」

「あのね……実はシヨコラがいなくなっちゃったんだ。昨日の夜会いに来てくれたんだけど、突然どこかに行っちゃって……。」

「シヨコラがここに……来た?」

「うん。ごめん、コーヘイには秘密にしといてってシヨコラが言ってたから今まで内緒にしてたんだけど、時々会いに来るんだ。旅のお土産話をしに……。昨日もそうだったんだけど、気付いたらいなくなってた。」

「それ……夢じゃないの?」

「違うよ! ちゃんと来たもん! その窓から入ってきて、このベッドのそこに座って……ほらつこのマリングラスだって……あれ!??」

「なー。夢見て寝呆けてただけだって。」

シヨコラにもらったはずのマリングラスもあんなにたくさんあった写真も無くなっていった。シヨコラが来た証拠をお兄ちゃんに見せられなかったのも悔しかったけれど、それ以上に口に出す毎に空々しく聞こえる自分の言葉が嫌だった。

「夢じゃないよ! シヨコラ行方不明になっちゃったんだよ! 誘拐されちゃったのかも知れないよ!」

「分かった落ち着け。シヨコラシヨコラって……まだ小さいお前には酷だろうがちゃんと聞けよ。」

ふう、と息を吐いてお兄ちゃんは僕の目を見つめて言った。

「翔子はな、海里……もうこの世にはいないんだよ。」

……嘘だ。



「お前が入院した頃に、翔子が乗っていた客船が炎上したんだ。火の回りが早くて、もうどうにもならなかった……。」

「嘘だ！ ショコラは死んでなんかないよ！」

半ば怒りながら泣きじゃくる僕に、お兄ちゃんは悲しそうな視線を向けた。

「……俺、もう帰るよ。今日来たのはな、お前の病気がだいぶ治ってきたから、もうじき退院できるだろうってお医者さんに言われたからなんだ。それだけ言いに来た。じゃあな。」

「待ってよ！ あのショコラの事だから、きっと海に飛び込んで……」

「いい加減にしろ！」

振り向いたお兄ちゃんの目は少し赤くなっていた。

「……俺だって認めたくないよ。でもな、翔子は死んだんだ！ どんだけ泣いたって帰って来ないんだよ！ ……お前にだって分かるだろ。頼むよ。翔子だけじゃない、親父もお袋もとくに死んでるんだ。お前にもすっかり前見てもらわなきゃ困るんだよ。」

「……。」

「翔子の事は……もう考えるな。」

……お兄ちゃんのバカ。

きつと昔シヨコラに振られた腹いせに、あんな事言ってるんだ。いくら何でもひどいじゃないか……。

その日の夜も、前日に続き綺麗な上弦の月だった。二日続けてシヨコラに会った事はないけれど、ものは試した。僕は深く息を吸い、目を閉じた。そしてゆっくり三つ数える。一、二、三……

次の瞬間目を開けてもシヨコラは現れなかった。

「やっぱりな……。」

僕はもう、心の奥では分かっていたんだ。分かっていたながら、お兄ちゃんの言葉も自分が分かっていた事も、認めようとしなかった。それを認めてしまっ



たら、もう永遠にシヨコラに会えないような気がして……でももう遅かった。だって僕は気付いてしまったのだから。シヨコラが出会うはずのない人と、出会ってしまった事に。

シヨコラが出会った髪の毛の長い女の人……それは紛れもなく、僕の死んだお母さんだった。

あれから十年の月日が流れ、僕は大学に進学した。兄さんが懸命に働いてくれたおかげで、僕は母さんの通っていた海洋大学に入る事が出来たのだ。今はその大学のセミナーとある島にきている。シヨコラの最後のお土産話に出てきた、ウミシヨウブの研究セミナーだ。

今にしてみれば、シヨコラの事は本当に夢幻としか言いようがない。月夜の晩に窓からひよっこり現れる女なんてそうそういないし、例のウミシヨウブにしたって現実味がまるでない。百年に一度しか咲かないなんて事もないし、白い花だって小指の爪程もない位の大きさだ。でも僕はかたくなに信じていた。シヨコラは機械だらけの病室に埋もれていた僕の世界を切り開いてくれた、かけがえのない人だった。例えそれが実体のないものだったとしても、だ。ウミシヨウブが小さな小さな白い花を一斉に海面に放つ所は滅多に見られるものではない。運が良ければ数日後に見られるはずだが、それまでの間は特にする事がなく、ほとんど慰安旅行のようなものだ。教授も生徒も皆浮かれて毎日泳ぎ回っている。

「皆ウミシヨウブよりもこれが目的みたいだな。教授だって『ウミシヨウブを取り巻く生態の調査のため』なんて言っていて……何も二週間も余分に入れる事ないのに。」

日が暮れてもキャンプファイアーでまだまだ盛り上がりつつある教授達を後に、僕は一人海辺に出た。夜の海は潮風が涼しく、何とも気持ちのいい所だ



った。珊瑚が眠る海は天の川を吸い込んで、透き通った群青をたたえていた。白くてまだ温かい砂浜に腰を下ろして、僕はただそれをぼんやり眺めていた。昔母さんも来た事がある海だ。シヨコラが話していたようにウミシヨウブの調査を行っていたんだらう。だとしたら、シヨコラもここに来たんだらうか——？

僕は目を細めて遠い沖の方を見やった。海面をなめらかに滑る白い花々が咲き乱れ、その中をゆっくりとジンベエザメに乗った二人が進んでゆく……穏やかな波の音の間からかすかな笑い声が洩れ、皓々と月明かりがそれを照らしている……そんな光景が見えても不思議ではない位、美しい海だった。僕は深く息を吸い、目を閉じた。そしてゆっくり三つ数える。一、二、三……もちろんシヨコラの姿はない。でも砂に押し付けた僕の手には、懐かしい感触があった。

「マリングラスだ……。」

細かい砂を払いのけ、僕はそれをまじまじと見つめた。十年前のあの夜、シヨコラが僕にくれた宝石まがいの宝物——色も形もそのままだった。遠い街の知らない誰かが使ったものが、海を旅して今僕の手の中にある。その遠い街の知らない誰かは、もしかしたら……

いつかシヨコラに会える日が来たら、今度は僕からお土産話をしてあげよう。そしてまた、あの頃みたいに笑い合えたらいい。大潮を待つ紺碧の海に、上弦の月が浮かんでいた。